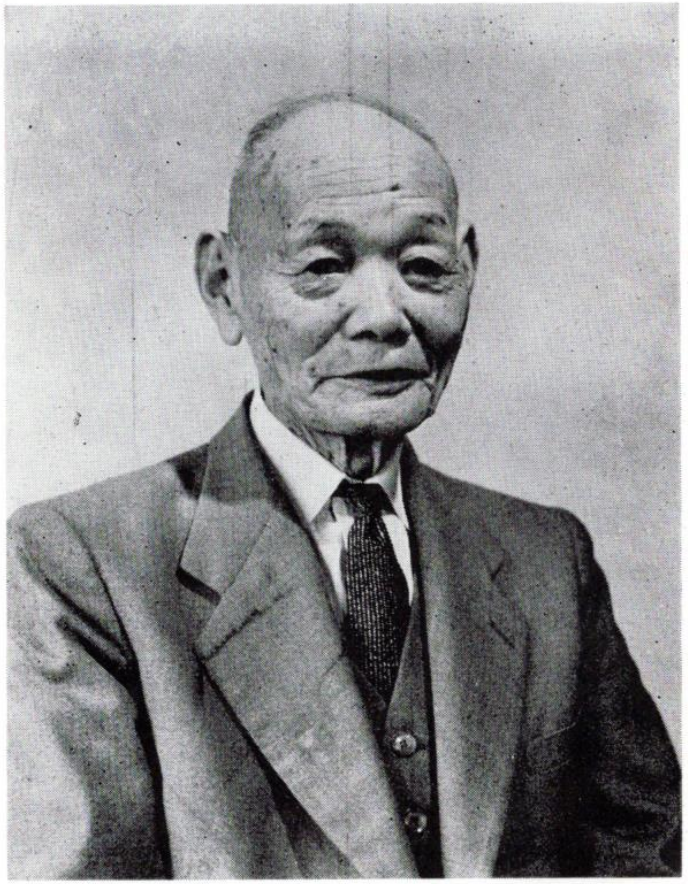
序

「ウルトラウエルス」（超顕微鏡的濾過性病原体）は斯学に於ける未開拓の分野であつた。之を究明しようとする学徒の努力は並々ならぬものであつた。思いば私が痘毒培養の研究に着手したのは、一九一六年のことであり、固型及び液体培養地に痘毒を発育させようと試みたのである。一九二五年に至り漸く胎生学的発生臓器に着眼し、創意工夫をこらし、孵化過程中の受精卵を求め痘毒を接種して培養に成功したのである。

こゝに至るまでは先賢諸氏の文献と相対応し、痘毒組織の変化に伴う諸現象を指摘証明し、培養痘毒はいささかも痘毒の本質に変化なく、痘苗として使用しても差支ないことを確め得たのである。しかし受精鶏卵に痘毒が発育すると云う事だけに止まらないで広汎に亘り「ウエルス」並に「リケツチヤー」等にも応用出来る事に意味があるのである。受精鶏卵培養は優れた培地であると云うことは今や周知の事実であり各種予防液を製造して居る現況である。



「ウエルス」乃至「リケツチヤー」の培養は廿世紀の斯学に專念する者の課題であつたが、之れの解決の時期が到来し、私が辛うじて卒先究明して日本が欧米学界に遅れをとることなく、アメリカの科学者「リワース」「グツトパスター」氏等に先き立つて発表したのであつた。続いて独逸科学者等の発表を見るに至つたが私は我が幸運に対して誠に感慨無量である。

私の研究が人類に福祉幸福を齎らし得たことは科学者として満足であり、且つ老年の現在大なる慰安を覚えている。

今回はからずも喜誠会員の来訪あり、『郷土の誇りとして喜誠会より研究業績を是非出版したいから資料を提供して欲しい。尚資料の取捨は喜誠会の責任に於いて且つ編集は眞船始氏に一任する』とのことであつた。

唯々諸君の御好意に対して衷心より感謝して敢て序とする次第である。

昭和三十三年九月

助川喜四郎

はしがき

この本は医学博士助川喜四郎先生の偉大な学問的業績の大要を、世の人々に知つて頂くために、書いたものであります。しかし何分にも内容が極めて専門的なものだけに、所期の目的を果たしているかどうか甚だ疑問であります。

先生より多くの資料を拝借し、また先生の御意見も聞き、一般の人々の理解を得ることに重点をおいて、努めて平易に述べたつもりであります。その為めに貴重な実験や研究を省きました。門外漢の我々がまとめましたから、先生の学問の本道より或はふみはづしている所があるかも知れません。この事に関しては、才一に先生に対して洵に申訳なく、才二には科学的に関心を持たれる方々に対して、興味を殺いだと考えられます。この点深く御詫びいたします。

しかしながら、幾分なりとも、先生の学問研究の重要さと偉大さを把握して頂けば、私達の願は足りるのであります。

先生の徳を慕う私達は、貧しい此一篇を世に送ることによつて、先生に対する感謝の意を表わす次才であります。

昭和三十三年九月

先生の御健康を祈りつゝ

喜誠会員一同

目次

一、先生の学問の偉大さ……一

二、先生の学問的業績……六

イ、狂犬病に関する研究……六

ロ、天然痘に関する研究……一一

1、超顕微鏡的濾過性病原体……一五

2、痘毒病原体……二三

A、実験的分離痘毒の家兎角膜接種試験……二七

B、家兎眼房内接種材料及び実験方法……二九

C、家兎眼房内接種所見……四〇

D、角膜内被細胞に於ける所見 ……四一
E、既定痘病の家兎実験 ……四三
F、「グアルニーリ」氏小体と痘原体の関係 ……四六
G、病原探索と開発 ……四八
H、「グアルニーリ」小体 ……五五
I、痘瘡病原体の研究総括並にその意義に就て ……七一
J、濾過性病原体研究の応用 ……九〇
K、痘毒に関する諸外国の研究 ……九三
三、先生と学会 ……九五
イ、東大に於ける日本医学会総会 ……九五
ロ、伝染病研究学術集談会 ……一〇三
ハ、九州帝大に於ける病理学会 ……一〇五

四、先生と学問的に関係の深かつた人々 ……一一九
イ、恩師志賀 潔先生 ……一一九
ロ、青木 薫教授 ……一二四
ハ、佐藤 清教授 ……一二六
ニ、先生の研究に対する理解者 ……一三七
五、年代的に見た先生の研究と特許 ……一三三
六、茨城県に於ける実施情況（県衛生課発表の写） ……一四五
七、先生の略伝 ……一四八
八、参考資料 ……一五〇